

酒々井駅古松碑（酒々井字内方）

この古松碑は、この地にあつた名木「八抱えの松」の枯れた翌年の明治三年十月、これを惜しんだ人達の発起で佐倉藩大参事平野重久の撰文、書学教師平林辰協の書によって建立された高さ二・一メートル、巾〇・九〇メートルの碑です。

碑文には「印旛沼を望む、この地には神宮寺があり、酒々井地名の由来となつた酒泉・古井戸をたたえた古碑があること。」また「八抱えの松と呼ばれた樹齡七、八〇〇年の古松があり、古松は千葉氏の城下町のなごりであつたが、天保年中に落雷にあつて樹勢が衰え、明治二年に大風に遭つて枯死してしまつたこと。」や故事をあげた後「時を経れば世の中は変わつてしまふが古松と酒泉のことは末永く伝えたい。（趣意）」と記されています。古松は『成田名所図会』に偉容が描かれています。

古松碑の銘文

酒々井駅距佐倉城一里而遙臨印旛湖亦一勝地也嘗有古井相伝古湧出酒泉是駅之所以得名也其事雖近荒誕然口碑所伝不可誣也而古井廢既久矣其遺跡今在神宮寺中有殘碑文磨滅不可読可惜耳神宮寺之西百數十歩有古松高可百尺其大八人圍之所謂可蔽牛者里人弥之八圍松蓋七八百年外物其下有妙見小祠伝以為神樹古松所在称肥前第址側有坂亦称肥前坂肥前者人名千葉氏之臣属也按此地係千葉氏墟長禄年間千葉介輔胤自千葉移于将門山居焉経九世至重胤天正十八年與北條氏共亡焉今就其遺趾想之千葉氏我総之名族当時之城廓必当門闕巍然楼櫓層出氣象雄偉臣属之第宅環列及此等地瓦屋相望烟火稠密極一時之盛矣而今皆蕩為冷風化為蔓草或變為麦隴菜田片瓦不存惟見蕘兒耕氓往来其耳間此松蓋當時之遺愛物而依然不改面目鬱々含翠可謂稀世之珍也先是天保年間為雷電所擊半面枯焉去年己巳七月又

為大風所倒遂枯焉里老愛惜之余胥謀欲就其根側立石使命松遺跡不煙滅請文於余嗚呼草木之無無情其生其枯亦有數而然者人無如之何也余嘗而西遊過播磨至曾根視菅公手植松寬政年次既枯里老架屋保衛其根幹蓋出敬菅公之余也經高砂視偕老松天正之亂兵士伐以為篝火牴尾上視連理松亦三木之役為兵所斬伐亦何獨怪此松為大風所倒而枯哉世間万事須曳變滅皆不足道以千葉氏之名族猶其亡也忽諸今過其遺址徒使人悲思此松從千葉氏之亡者數百年其得壽亦多何憾之有焉今識其顛末並古井之事於是乎古松之名酒泉之事永不朽矣是里老之所希望也

明治三年歲次庚午十月甲午朔二十五日戊午建

佐倉藩大參事 平野重久撰

佐倉藩書學教師 平林辰協書並篆額